

先生方、保護者の皆さま

「マスク外せない」は非常事態！！ マスクは「しない」が基本だよ！

今こそ、子どものマスク依存について真剣に考えてみませんか？

新型コロナ流行からはや3年が経過しましたね。コロナも弱毒化し、2023年3月13日にはマスク着脱は個人の自由であることが再確認され、5月8日からはコロナ感染症の分類も5類に変更されます。もうコロナ前の生活に戻ってよいのです。

この3年間子ども達は、感染症の蔓延を防ぐため、誰かの命を守るためという理由で、マスクの着用をなかば強要されてきました。

その結果子ども達は・・・



・・・もうマスクを外せない状況に陥ってしまいました。

コロナ騒動を振り返ってみましょう

Q: コロナに感染したら死んでしまうのでは？

A: コロナウイルスの脅威は去りました。オミクロン株変異以降の重症化率はわずか0.01%以下で、インフルエンザ(0.03%)を下回っています。

こうしたウイルスの変遷を踏まえた上での、5類移行です。もう生活をコロナ以前に戻していきましょうということです。健康者、特に若年者では普通感冒に負けない免疫システムが備わっています。

Q: マスクに感染予防効果はあったのでしょうか？

A: 1月30日、コクランレビュー(治療と予防に関する医療情報を科学的根拠に基づいて検証する国際組織)から、「マスクの着用は呼吸器系ウイルスの拡散を制御するか？」についての検証結果が示されました。

結果は・・・ **マスク着用には感染を制御する効果は期待できない。**

社会は非科学的な感染対策を子ども達に押し付けてしまっていたのです。3年間も・・・

顔を隠して生きるのは危険！

私たち人間は集団の中で生きていく生き物です。誕生したその瞬間から、お父さんお母さんの顔いっぱい笑顔を見て安心し、口から発せられる言葉を見て聞いて学び育っていきます。子どもの健全な発達に、口を含めた表情は絶対に必要なのです。

大口を開けて笑う、食事はぺちゃくちゃおしゃべりしながら食べ、



合唱やカラオケで熱唱し、
大好きな人の笑顔を見てきゅんとする。



口元は人間にとって無くてはならない大切な一部であり、隠して生きていくことなどありません。

外していい。でもなぜ外そうとしない？ 外せなくなってしまったのか？



主に思春期の子供について述べますが、この時期は自我の成長・確立の過程で精神が不安定になりやすく、自己肯定感が低くなりがちです。また容姿についての悩みも生まれる時期。

成長の過程で、友達関係が苦手だな、人が自分をどう思っているか怖いな、と思う子どもは少なくありません。正常の社会であれば人との関わりから、勇気を出して怖いこと、辛いこともたくさん乗り越えて大人になっていくはずでした。

しかしその時期にマスクを着ける生活が3年も続き、顔を隠して生きることができることを知ってしまった、そしてそれが案外心地が良いと感じてしまった子がたくさんいたということです。

ちょっとしんどいけど、生きていくうえで必要なトレーニングを3年ものあいだ回避することになってしまい、ついには対人恐怖・視線恐怖の傾向に陥ってしまったのではないのでしょうか。

それは自信の無さのあらわれでもあります。

このままでは自己肯定感が低いまま、本当の自分を受け入れることができず、また本当の自分を他人には見せられずに生きていくことになりかねません。

でも…子ども達にそうさせてしまったのは私たち大人の責任では？

今が正念場！

私たち大人はこの問題をもっと真剣に考えなくてははいけません。

いってみれば**マスクを外せない状態こそ、非常事態**です。

大人の始めたことです。大人が子供に強いたことです。私たちには呪縛を解いてあげる義務と責任があります。

私たちにできることは何でしょう？

- ・感染症を過剰に恐れることはないと説明してあげてください。
- ・「マスクはしない」が人間の当たり前だよ、と教えてあげてください。
- ・どんな自分でもいいんだよ、と安心させてあげてください。

そして…

学校の先生方、保護者の皆さまが率先してマスクを外しましょう。

自我の芽生えが乏しい時期の子どもは自信が無く、どうしても周りの社会に合わせてしまうのです。ここで踏ん張らないと、自分を否定したまま大人になってしまう可能性があります。



学校現場からの大切なメッセージ

原口真一先生 栃木県の元公立学校校長先生

コロナ禍当初から子ども達のマスク長時間着用の危険を訴え、学校行事を中止することなくほぼ例年通り実行された。子ども達の健全な成長を願い、各地で活動されている。

コロナ禍が始まった当初から、「健康な子ども」にまで長時間のマスク着用を強い、呼吸を制限することがいかに理不尽であるか、顔を見せて生活することが「人としての尊厳」を育むのにどれだけ大切か、私の頭の中は「問」だらけでした。一方、「子どもの目」にも、健康な教師(大人)が皆マスクをし、無表情でこちらを向いている景色が日常になっていきます。子ども達の柔らかな感性に「この世には大変な病が蔓延しており、ただ生きていくのも困難な“穢(けが)れた場所”なんだ」が刻み込まれていきます…

本来学校というところは、子ども達が「この世界は素晴らしく、夢と希望に満ちている」との思いを胸に成長していく「美しい場所」であるべきなのに…

健康状態に関わりなく「マスクありき」の感染対策の裏で、失われるものの大きさに愕然としました。

ですから私は、「(症状がないのに)マスクをしている姿を“子どもが見る景色”の一部にしてはならない」との思いから、マスクは外して颯爽と生きよう、と、これまでずっとそうしてきました。

「大切な誰か(子ども達)」を守るために。

今こそ、コロナ禍の傷跡から抜け出せなくなってしまう子ども達のために、勇気ある大人が「責任を果たすべき時」ではないのでしょうか。

